

『何かを待ちながら』（男女2名）

素舞台。ホテル街の道端の設定。
登場人物…

祥太 … 30代男性。会社員。
有美 … 30代女性。

二人は横並びに立っている。

祥太「どうだった？」

有美「どうって？」

祥太「さっきまでのことというか」

有美「ああ」

祥太「失格？」

有美「そんなことない」

祥太「俺、やさしい方だと思うんだけど」

有美「そうかもね」

祥太「正直な意見聞きたい。せっかくだし」

有美「やさしいと思うよ」

祥太「だよな。逆に物足りないとかは？」

有美「別にないけど」

祥太「けど？」

有美「楽しんでもん勝ちだよ。なんでそんな」

祥太「・・・そうだよな。まあそっか」

有美「うん」

間。

祥太「いつも、その、こんなことを？」

有美「ええ、まあ」

祥太「楽しくてやってるの？」

有美「別に」

祥太「反対したりする？」

有美「しない」

祥太「後で俺を訴えたりないよな？」

有美「それはない」

祥太「なあ、何で」

有美「ねえ」

祥太「ごめん」

有美「不安なの？」

祥太「そりゃ。でも、相手にも相手？　がいるんだから、安心といえば安心、かな」

有美「うん？　・・・うん」

祥太「うん」

間。

祥太「戻ってこないな」

間。

有美「まだ時間あるから」

祥太「そうなんだよ。早く切り上げちゃったから」

有美「楽しかったよ」

祥太「ほんと？」

有美「うん。もしかして自信ないの？」

祥太「自信？　なんだよそれ」

有美「・・・」

祥太「ごめん。」

俺はさ、精一杯あいつのことを思ってやってるよ普段。
ただ最近減ってるから、飽きちゃったのかなとか、思うんだよ、どうしても

有美「え？　減ってる理由がセックスの、技術的なものだと思ってるの？」

祥太「多少そういうことでもあるだろう、とは」

有美「そう」

祥太「おふたりも、レスなの？」

有美「別に」

祥太「え？　じゃあなんで」

有美「盛り上がるでしょ。この後が」

祥太「この後？　するの？　マジ？」

有美「たぶんね。というかいつもそう」

祥太「え、そうなんだ」

有美「そっちはしないかも？」

祥太「と、思うけど」

有美「初めてだよね」

祥太「ああ」

間。

有美「毎回思うんだけどね。戻って来なかったらどうしようって」

祥太「そうなんだ。それでも結局は戻ってくるんだろ？」

有美「うん」

間。

祥太「で、戻って来なかったら？」

有美「え？」

祥太「どうしようと思ってるの？」

有美「いや、ただ、どうしようって。いつもそう思っている間に戻ってくるから」

祥太「聞きたい」

有美「何を？」

祥太「いつも考えていること」

有美「いや・・・」

祥太「興味あるんだ」

有美「興味？・・・私に？」

祥太「といより・・・」

有美「彼氏の言いなりで、知らない男と寝るなんて？」

祥太「そうじゃなくて」

有美「別に言いなりじゃない」

祥太「そうなの？」

有美「ええ、好きでやってる」

祥太「（困惑）」

間。

祥太「その・・・偶然？」

有美「何が？」

祥太「お互いスワッピングありなこと」

有美「必然」

祥太「必然って？」

有美「・・・」

間。

祥太「何がいいの？」

有美「何って？」

祥太「彼氏さん」

有美「相性」

祥太「そっか」

有美「彼女さん、えっと」

祥太「ヒカリ？」

有美「そう。ヒカリさんの何がいい？」

祥太「難しいな。美人でもないしな」

有美「・・・」

祥太「いや、あいつこそ面食いなんだぜ」

有美「・・・」

祥太「微妙だよな。分かってるよ。まあ現実はそのまんだろ」

間。

祥太「相性か」

有美「うん」

間。

祥太「・・・戻って来なくてもいいや」

有美「戻って来なくても別れられるわけじゃないよ」

祥太「そりゃそうだ」

有美「別れたいの？」

祥太「別れたい・・・違うな。今別れたら次は？　って思う。
ただ、今この人と家庭を？　って想像したら、違うんじゃないのって」

有美「好きで付き合ったんでしょ？」

祥太「まあな。誰だってそうだろう。きっとヒカリもさ」

有美「何年目？」

祥太「2年経つかな。そろそろ3年目。
でもさ、別に宣言して付き合いが始まったんじゃないんだ。
なら、このまま終わっちゃってもって」

有美「それでも、あなたはここで待ってる」

祥太「まあな」

有美「彼女に委ねているの？」

祥太「そうなのかもな」

有美「情けないね」

祥太「言うね」

間。

有美「出会えた喜びは一瞬なのにーってね」

祥太「(笑う) どうして別れの苦しみは永遠なのーってな」

(※銀杏BOYS「東京」の歌詞)二人笑う。間。

有美「今日戻って来なくても、彼女とのつながりがさっぱりなくなるわけじゃない。でしょ？
急に生活は変わらない。
なんとなく、すれ違いを重ねていつて、やがて嫌いになって」

祥太「別れの苦しみが待ってんのかね？」

有美「耐えられないよね。なら別れないほうがいいね」

祥太「苦しいのは永遠じゃない。きっと」

有美「お互い嫌いになるなり、別の人と出会うなり」

祥太「何？」

有美「別れがづらいのを知っているとなおさら別れられない」

祥太「うん」

有美「何ていうの・・・別れるために、するカップルも多いって話」

間。

祥太「正直・・・乗り換えたい」

有美「私は車じゃないよ」

祥太「そういう意味じゃない」

有美「それに彼は戻ってくるし」

祥太「戻ればいいのか？我慢してない？」

間。

祥太「俺、彼氏さん以上じゃないよな？」

有美「うん」

祥太「何が足りない？」

有美「何も足りなくないよ」

祥太「でも」

有美「十分だよ」

祥太「優良企業ってやつだし、そこそこだよ色々」

有美「もったいないくらい。私には」

祥太「なあ、いくつ？」

有美「歳？ 32。あなたは？」

祥太「34」

祥太何か言いたげに見つめる。

有美「何？ いつまで続けるのかって」

祥太「それ」

有美「別れるまでかな」

祥太「は？ 何それ？」

有美「え？」

祥太「え？」

有美「ああ。『結婚しないのか』とか言いたいのか？ 現実的じゃないでしょ、彼と私」

祥太「知らないけど」

有美「したいの？ 結婚」

祥太「そりゃあね」

有美「彼女と？」

祥太「それは分からない。正直、ヒカリは家庭的じゃない」

有美「家庭的、ね」

祥太「なんだよ」

有美「別に」

祥太「え、結婚したいとか思わないタイプ？」

有美「まあ」

祥太「何で？」

有美「両親が仲悪かったから、とかでいい？」

祥太「『とかでいい？』ってなんだよ。別に話したくないならそれでいいよ」

有美「結婚を考えてたこともあってね」

祥太「話してくれんだ」

有美「聞かれたから答えてるんだけど」

祥太「ごめん。聞きたいよ」

有美「ノリが合うし、楽で。男として色気はなかったけど安心感があった」

祥太「言われたくないかな」

有美「でも・・・遠くに行っちゃった」

祥太「・・・そっか」

有美「北海道の、千歳？ だっけ。空港ある」

祥太「なんだよ」

有美「転勤」

祥太「まあ遠いね。さすがに」

有美「私、仕事好きで。好きなことの延長みたいで楽しくて。

お金にはあまりならない、それでもね。東京を離れたくないと思った」

祥太「素敵だと思うよ」

有美「結婚ってなったら、今手にしているもの全部捨てるのか、って、考えたら涙が出たりして」

祥太「落ち着くまで離れて暮らすとかでもよかったんじゃないの？」

有美「・・・彼がね。何となくだけど、そんなの捨てればって思っているような気がして」

祥太「そっか。でもそう言ったわけじゃないだろ」

有美「まあ」

祥太「理由も言わずに別れたの？」

有美「ううん。その時に、コレを」

祥太「・・・コレね」

有美「彼も私も自信があった。お互い以上はいないって。ま、結果、お互い乗り換えたんだけど」

祥太「は？」

有美「で、今に至る、ってね」

祥太「彼氏さんとはコレで出会って・・・付き合ったの？」

有美「うん」

間。

祥太「あのさ」

有美「何？」

祥太「正直。よかった」

有美「・・・そう？」

祥太「うん。だってさ初対面だよ。なのに」

有美「なのに、ね」

祥太「なのにだよ。有美さんは？」

有美「それなり」

祥太「それなりか。でもハードルは下がるよな。しちゃったんだから」

有美「そうだね」

祥太「そう。だからさ」

有美「何？」

祥太「相手が戻って来なかったら、俺はまた会いたい」

有美「戻って来たら、会わないのね？」

祥太「それは・・・」

有美「(笑う) まあ・・・潮時ってやつなのかもね」

祥太「コレで始まったんだろ？ コレで終わったっていいんじゃないの？」

有美「そうかもね。でも、戻って来なかったら、かな」

祥太「そうか。気持ち的には？」

有美「ねえ、結婚したいんでしょ」

祥太「え、ああ」

有美「今私に乗り換えて、何が変わるの？ 現状と。私と彼女さん、何が違うの？」

祥太「それは・・・」

有美「さめただけでしょ」

祥太「きついな」

有美「でしょ。なら、やめた方がいいね。私なんか」

祥太笑う。

有美「私、仕事続けたい」

祥太「いいよ」

有美「でも経済的には頼りたい」

祥太「いいよ」

有美「家事は全部はできない。苦手なこと多いし」

祥太「うん。でも、やりたくない、じゃないだろ？」

有美「好き、があれば、がんばりたい」

祥太「なるほどね」

有美「次はあなたの番」

祥太「・・・うーん。やさしくしてほしい」

有美「好きになれたらね」

祥太「1日中セックスする日がほしい」

有美「好きになれたらね」

祥太「子供がほしい」

有美「好きになれたらね」

祥太「なんだよ。結局、恋からはじめないとダメじゃんか」

二人笑う。

有美「ねえ、戻って来たら？」

祥太「・・・」

有美「踏み出せないんでしょ」

祥太「まあ」

有美「私に委ねているの？それとも彼女さんに？」

祥太「どっちなんだろうな」

有美「情けないね」

祥太「言うね。まあその通りか」

間。

祥太「好きになれたら、か」

有美「うん」

祥太「コレで出会って・・・ってさ。その、乗り換えたって話。相手が戻って来なかったの？」

有美「そんなとこ」

祥太「好きになったの？」

有美「そう」

祥太「・・・」

有美「向いてないね」

祥太「何に？」

間。

有美「賭けよう。10秒カウントして戻って来なかったら。乗り換えよ」

祥太「待って。俺に乗り換えて、何が変わる？」

有美「『彼にさめたの』でいい？」

祥太「いや、それは」

有美「10、9、8、7」

祥太「なあ」

祥太、人の気配に気づく。

有美「6、5、4」

祥太「何かは変わる気がする。好きになる気がする。だから」

有美「（気づく）戻ってきたね」

有美遠くの相手に手を振る。

祥太「・・・（息をつく）」

有美「だから？」

祥太「え・・・」

有美「（ため息）私別れるわ」

祥太「なら」

有美「もう遅い」

祥太「・・・」

有美退場。暗転。